

「出雲流庭園」のバリエーションと築地松民家の庭

「庭園文化研究分科会」 武田 隆 司

1. はじめに

「島根に残る日本庭園を地域資源としてとらえ、その活用や保全を考える」をテーマに出雲地方の日本庭園の視察をはじめて3年目になる。これまでに訪れた庭は、寺院や公共の庭、個人や商業施設の庭も含めて23カ所、個人的な視察も含めると30カ所を超えた。中でも「出雲流庭園」といわれるこの地方にしか見られない様式の庭に注目し、その特徴について調査を行ってきた。

「出雲流庭園」の命名のもととなった「出雲流庭園の歴史と造形」（以降 S50 年著書）を参考書として当時の調査から40年近く経過した庭を視察し、その作庭技法を検証するうちに、出雲流といわれる定型パターンの庭に中にもバリエーションがあることが分かってきた。

平成22、23年度は、豪商、豪農、本陣、寺院の庭といった比較的大きな規模の庭園の調査を行ってきたが、今年度は出雲流の庭の原形といわれる簸川平野の築地松民家の庭を3カ所視察する機会に恵まれた。これらは昭和後期以降の比較的新しい庭であり、いわゆる一般庶民の庭と呼んでよいものであった。3カ所の庭は驚くほど同じ形の庭であったが、昭和50年著書に記載されている出雲流の技法の特徴とはやや異なった印象を受けた。

今年度はS50年著書ではほとんど記載の無かった簸川平野の築地松を持つ一般的な民家の庭（出雲流）について注目してみたいと思う。

2. 出雲流庭園の特徴と出雲流庭園度

昨年度はS50年著書に書かれている出雲流庭園の特徴を下表の7つの指標に分類し、具体的な技法44項目について該当するかどうか現地で確認し、出雲流庭園の度合いを評価してみた。

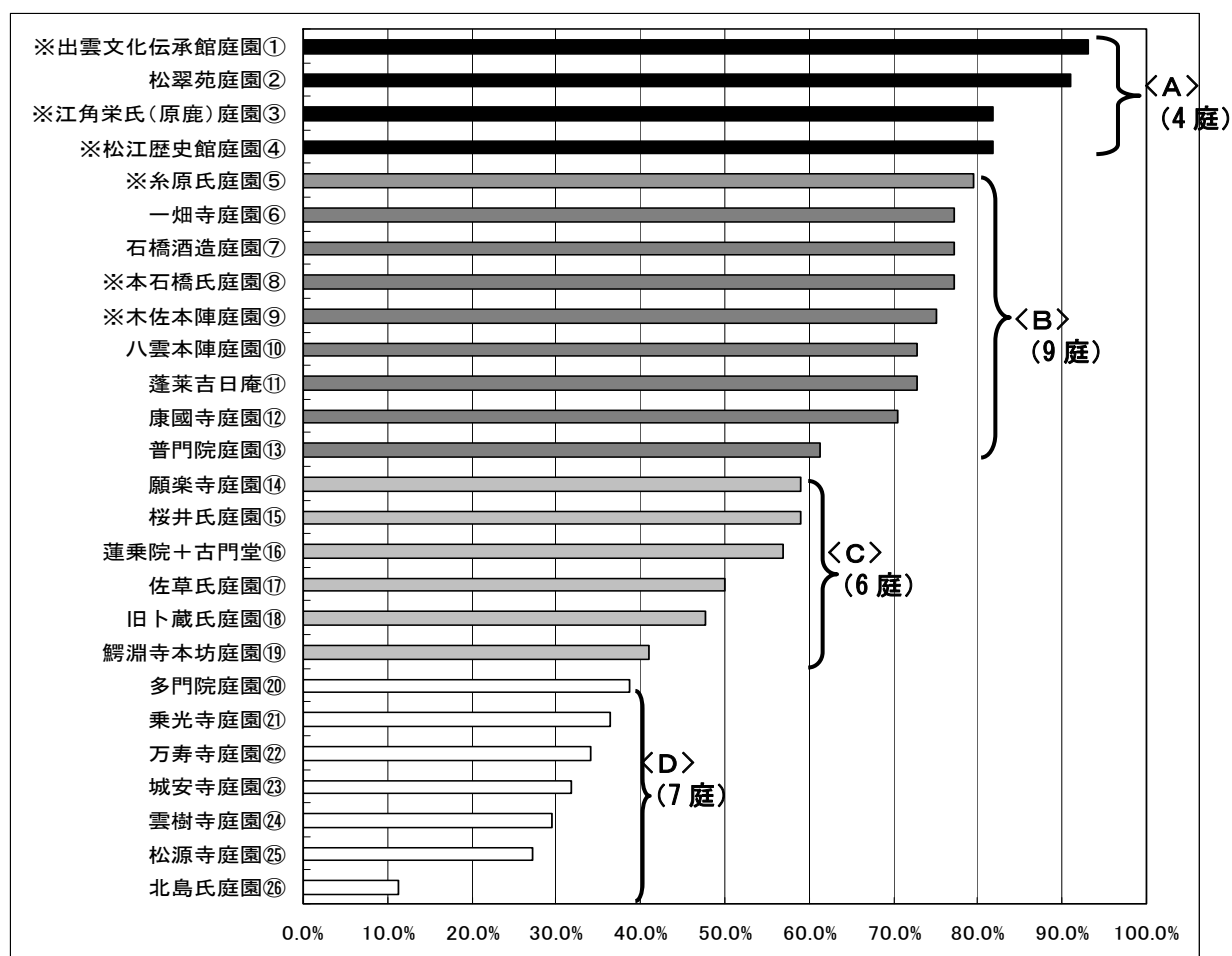
これに今年度視察した庭（個人庭園は除く）も含めて26庭園の出雲流庭園度を評価する。

＜表 出雲流庭園の技法一覧＞

出雲流庭園度の指標	具体的な技法（44項目）
1. 庭の配置	・方位（建物の南西）・アプローチ（門→中門・玄関→庭）等
2. 基本的な構造	・平庭・枯山水（池の有無）・形状（L字型）・庭の境界等
3. 茶道の要素	・茶室（茶席）・つくばい・鉢前・竹垣の有無、形状等
4. 飛び石の特徴	・敷砂・高さ・丸石小・加工石（短冊・石臼）・踏分石大 ・短冊石（配置）・靴脱ぎ石（御影石）or 自然石は2箇所以上
5. 石組み・灯ろう	・簡素な石組み・T字形石組・来待石灯ろう・兜形等
6. 庭木の特徴	・緑量少・常緑樹主体・クロマツ（雲竜仕立）等
7. 建物周りの特徴	・床の高さ（高い）・犬走りの形態（砂利、たたき）等

次頁のグラフは、出雲流庭園の技法44項目の該当率＝出雲流庭園度を示したものである。

<図 出雲流庭園度> (A : 80%以上、B : 60~80%、C : 40~60%、D : 40%未満)



※印は、パンフレット、HP等に出雲流庭園であると明記している庭

3. 出雲流庭園の分類

前頁のグラフのうち、A群の庭は出雲流庭園と呼んで異論はないと思われる。またB群については該当率が60%以上であり、出雲流庭園と呼んでよいかどうか賛否の分かれる庭もあるが、バリエーションの一つであると考えて良いと思う。すなわち、庭の立地や技法により、A,B群の出雲流庭園はいくつかのタイプに分類できるとと思われる。

(ア) 簸川平野の豪農屋敷の庭

出雲流の原形といわれるタイプ。築地松に囲まれた豪農、地主の屋敷の庭であり、庭の方位、アプローチ、平庭で枯山水等の基本構造、茶道の要素、飛び石、灯ろう、庭木、建物周りの形状等すべての要素が典型的な庭である。庭園の規模は1000~3000㎡と大きい。

(イ) まちなかの商家の庭

市街地にあるため、(ア)に比べて敷地の制約があり、庭の方位や平面形状が様々であるが、平庭の枯山水で、茶道の要素、飛び石、灯ろう、庭木、建物周りの形状は出雲流の技法を取り入れている。

(ウ) 奥出雲の地主の庭

江戸時代に作られた立体的な池泉庭園に、明治以降建物周りを中心に、出雲流の技法により改修が加えられた複合型の庭園。

(エ)寺院の庭

江戸時代以前に作庭された寺院の庭園に、江戸末期に出雲流の技法により改修が加えられた複合型の庭園。外部の景観を取り込んだ手法（借景）や池泉を持つ庭もある。

(ウ)、(エ)はともに江戸時代以前の庭に後年出雲流の作庭技法が加わった複合型の庭である。

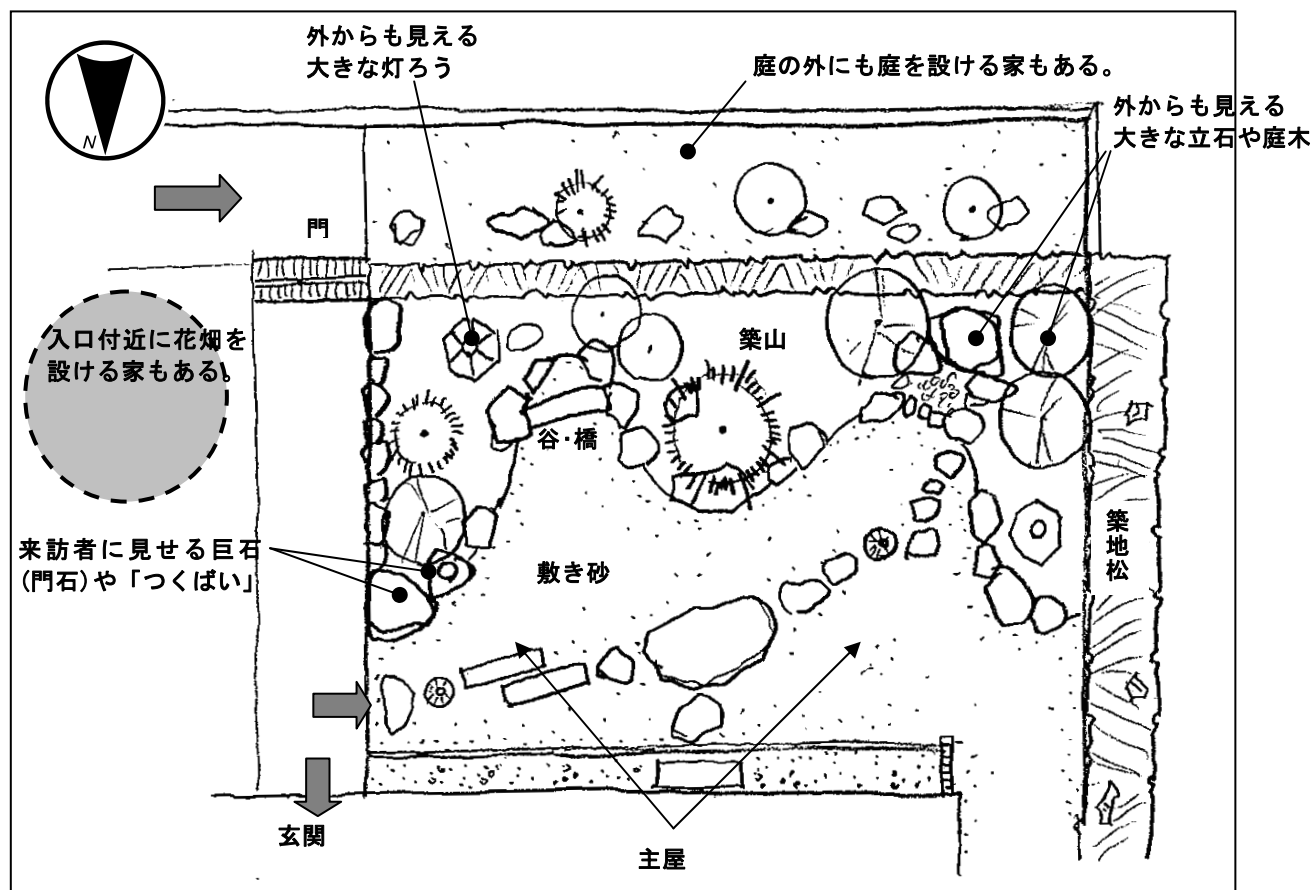
<出雲流庭園の分類> (A, B群より)

タイプ	庭園名
(ア)簸川平野の豪農屋敷の庭	①出雲文化伝承館庭園、②松翠苑庭園、③江角栄氏（原鹿庭園）
(イ)まちなかの商家の庭 （商家・本陣・料亭等）	④松江歴史館庭園、⑦石橋酒造庭園、⑧本石橋氏庭園、⑨木佐本陣庭園、⑩八雲本陣庭園、⑪蓬萊吉日庵庭園
(ウ)奥出雲の地主の庭	⑤糸原氏庭園、⑮桜井氏庭園－C群）
(エ)寺院の庭	⑥一畑寺庭園、⑫康國寺庭園、⑬普門院庭園

4. 築地松民家の庭（出雲流）の特徴

上記の(ア)～(エ)の庭は、地主や豪商、寺院等比較的規模の大きな庭を分類したものであるが、今年訪れた簸川平野の一般的な民家の庭は、同じ立地ではあっても(ア)豪農屋敷の庭とはややちがう特徴が見られた。視察では、築地松のある民家の陰手刈り師（のうてごり=築地松の剪定技術者）であり庭づくりや手入れも営む三島氏に庭の特徴などを聞くことができた。以下、豪農屋敷の庭と比較した築地松民家の庭の特徴について記す。

<図 築地松民家の庭の模式図>



1) 庭の規模、形状

築地松の形態、家屋の配置、庭の方が南西を向いている点は、豪農屋敷とほぼ同じであるが、門から玄関に至るアプローチの際、左手の庭との境界部に塀を設けず、非常に開放的な空間となっている。庭の広さは、10m（奥行き）×20～30m（幅）で 200 m²～300 m² が標準的であり、豪農屋敷の庭の 1 / 5 程度の規模であろうか。

2) 立体的な庭

庭を訪れて最初に感じたのは、庭の立体感である。ほぼ敷地の 1 / 3 に庭を囲むように高さ 1m 程度の築山が設けられ、樹木や灯ろう、景石等が配された植栽地として、手前の平坦な敷き砂部分との高低差を強調している。築山は庭に向かって左手に谷や溪谷を表した地形、中央部には真木となる松を配した岬状の地形、右手には滝（あるいは深山）を表した山の地形で構成されている。出雲流の庭はシンプルな平庭の枯山水という特徴からはかなりかけ離れた感じとなっている。三島氏によると形のよい松の根元を見せることがよしとされ、そのためにわざと築山を設けているとのことであるが、これは、比較的面積の小さい庭を少しでも広く見せるために地形に変化を持たせ奥行き感を出しているのではないか。松江歴史館庭園④の視察の際、作庭した角氏（造園家）の話の中でも、奥行き感を出すためにあえて枯れ池を設けて地形に起伏をつけたとのことであった。

3) 石組みに力を入れた庭

これまで見た豪農屋敷に比べて、景石の量が多いことに気づく。またひとつひとつの石が大きく、ともすれば庭の空間スケールを超えているのではと思われるほどである。特に庭の右手の滝（あるいは深山）を表した立石（通常3石使う）はどの庭のものも大きく、生け垣越しに外からも見えるほどである。また、左手の谷部には切り立った溪谷を思わせる石組みや石橋が、正面の松の築山の正面にも大きな横石が据えられている。三島氏によると門から庭へ入る築山の門には「門石」といわれる巨石やつくばいを置くのもこの地方の特色で、「門石（かどいし）」が大きいほど家の格が上がるのだそうだ。狭い敷地に築山を設けることで大きな石を土留めに使う必然性はあるのであろうが、やはり他の家の庭よりも多くの石、大きな石を置きたいという意識も働いているのであろう。石組みより飛び石を主役とするとされている出雲流の庭のイメージとはやや異なる。

< 築山による立体的な庭 >



< 庭の外からも見える立石 >



4) 外からの景観を意識した庭

S50 年著書では出雲流の庭は、築地松や塀、生け垣で囲まれた庭とされ、比較的閉鎖的な庭という認識であった。豪農屋敷の庭はそのような造りであり、唯一中門からちらりと庭の中を見せることで期待感を増す技法を取っていた。しかし庶民の庭はもっと開放的で外へアピールする庭であるように思える。門を入ると左手には庭が一望でき、そのまま縁側に訪問者を向かい入れるような造りである。また、庭の樹木はもちろんのこと、灯ろう、立て石までも生け垣や塀越しに庭の外から見るのできるのである（写真）。周辺の民家もほとんどが生け垣から立石の頭がのぞいていた。見せるのは塀越しだけではない。塀の外にも枯山水の庭を設けたり、花畑を設けたりと、明らかに外からの景観を意識した庭（屋敷）も見られる。

＜立石、樹木、灯ろうの見える庭＞



＜庭の外部に作られた枯山水の庭＞



5. 調査のまとめ

どこまでが出雲流庭園と呼んでよいのかは意見の分かれるところであるが、どうやら出雲流と呼ばれる定形化した庭の中にも、その立地や歴史背景によりいくつかのパターンがあることが分かってきた。そして出雲流庭園の原形といわれる簸川平野の築地松屋敷の庭についても、S50 年著書に記載されている豪農屋敷とはやや趣の異なった庶民の庭のタイプがあることが分かった。これらは昭和後期以降の比較的新しい庭であろうが、車で田園地帯を走ると車窓からでも生き写しのような庭が生け垣越しに数多く確認できる。むしろこのタイプの方が簸川の築地松屋敷（民家）の代表的な庭と呼んでよいようにも思われる。

また築地松民家の庭は、これまでの出雲流の庭のイメージ、すなわち外部空間と境界を明確にし、内部空間の中で完結する庭とは異なり、外部にアピールする庭であり、築地松や建物とともに簸川平野の田園風景を構成する景観要素になっていると思われる。

6. 庭園の保全と活用

今年訪れた松翠苑や蓬萊吉日庵といった料亭の庭は非常に手入れが行き届いていた。これは「美しい庭を眺めながらのお食事を」のように庭が店の目玉になっていることによるものである。簸川の3軒の築地松民家の庭もよく手入れされていたが、家主はやはり維持管理の負担を口にし、生活スタイルや価値観の変化もあって代替わりにより庭が無くなることを懸念されていた。また、昨年まで訪れた庭の中にも庭の管理が行き届かず荒れて

いるものも多くあった。今や「出雲流庭園」というこの地方独特の文化（茶道）や風土、伝統技術によりできあがった地域資源が失われつつある状況である。

今後の庭の保全を考えた時、個人の庭については、まず所有者のモチベーションの向上が重要であると思う。前述の民家の庭の家主の方に、「よく手入れされていますね」、「立派な松ですね」、「珍しい石ですね」など言っていると非常にうれしそうな顔をされ、庭のうんちくに花が咲く。もともと庭はもてなしの空間であり、交流の空間であったのだ。今年訪れた家の人々は皆もてなしの心を持つ人々であった。手入れが行き届いた庭は人に見てもらいたい。来訪者にほめるとまた手入れに力が入る。モチベーションの向上のために庭の顕彰制度やオープンガーデン制度^(注)の導入などが考えられる。東北地方にも地域特有の「武学流庭園」があるが、毎年5月に民家の庭園を開放した「庭園巡り」を行っている。簸川平野でも原鹿庭園周辺などは優れた庭が連単しており、期待したい。

一方、地域の景観づくりの観点からも、外にアピールする築地松民家の庭は築地松や建物とともに簸川平野の重要な景観要素になっている。これまでは築地松がクローズアップされてきたが、庭についても地域の景観保全の対象として重視することが望まれる。

また、所有者には「出雲流庭園」について造詣を深めてもらい、自分たちの守ってきた庭が地域の資源としていかに貴重なものであるか理解していただき、誇りを持っていただくことが重要と考える。そのためには、今回の視察の三島氏や角氏のような「庭師」の方々に庭の解説や伝承に活躍していただきたいと思う。

「庭」は四季折々様々な表情を見せてくれるきわめて魅力的な資源である。今回の視察についても、「通常観賞できない出雲流の個人庭園」、「300坪の庭園を眺めながらの1日一組限定予約の料亭での食事」という案内により20人以上もの参加を見ている。少しの付加価値によってさらに人を引きつけるポテンシャルを持っているのである。出雲地方には日本庭園ランキング上位の庭も多く残っている。今後もこの魅力的な資源に注目し、調査、研究、そして情報発信をしてきたいと思う。

<築地松と庭と建物のたたずまい>



<入口付近に設けられた花畑>



(注)

「公開情報が周知されていることにより、一般市民が入り込み、鑑賞することができる個人所有の庭園」と解釈され、通称、「個人庭園の公開」と云われる（相田明、2005）